京都大学	博士（文学）	氏名	CELIK Kenan
論文題目	南琉球宮古語史		

（論文内容の要旨）

本論文は、沖縄県宮古諸島で伝統的に話され、日琉語族の南琉球語派に属する宮古語を対象とし、先行研究のデータに加えて論者自身による現地調査によって得られたデータに基づき、歴史比較言語学の方法を用いて、その言語の歴史の一部を明らかにするものである。本論文は全5章からなる。第1章では、本論文の対象、目的および方法について述べ、研究対象となる宮古語に関する基本的な情報を記している。第2章では、分岐学の手法を用い、南琉球および宮古諸方言の系統関係を扱っている。第3章では論者の調査結果を元に、宮古語の3つの方言（多良間仲筋、水納島、下地皆愛）のアクセント体系を記述しながら、宮古語の韻律構造について考察を行っている。第4章では、宮古諸方言の比較データに基づき、宮古祖語の動詞形態論を再建し、第5章では、本論文で明らかになった結果を要約し、残された研究課題について述べている。

第1章では、本論文の対象、目的および方法について述べた後、宮古語に関する基本的な情報を記している。本論文の対象は沖縄県宮古諸島で伝統的に話される宮古語である。この言語は日琉語族の南琉球語派に属し、集落を単位とする約40種類の方言からなる。宮古語の全ての方言が同じ宮古祖語に遡ると仮定されているが、現在では方言間の差が著しく、宮古諸島は非常に多様な言語空間をなしていると言える。このため、厳密な比較方法を用いれば、歴史文献のほとんどない宮古語でもその歴史を正確に明らかにすることが可能である。そこで、本論文では特に3つの事象、すなわち、「系統分類」、「アクセント体系」、「動詞形態論」を取り上げ、次に述べる目的を掲げて議論を展開している。第一に、宮古諸方言および南琉球諸方言の大量のデータに基づき、分岐学の手法を用いて、宮古語の系統的位置、または、宮古諸方言の系統関係を明らかにする。第二に、論者の調査結果を元に多良間仲筋、水納、皆愛の3つの方言を取り上げ、そのアクセント体系を詳しく記述し、先行研究の結果を踏まえながら、それらの方言の韻律構造について考察を行う。第三に、歴史比較言語学の方法を用い、宮古祖語の動詞形態論の再建を試みる。

第2章では、分岐学の手法を用いて宮古語の系統的位置および宮古諸方言の系統関係を扱っている。系統関係を明らかにするためには、すなわちどの方言とどの方言が同じ祖語に遡り、同じ祖語からどのように分岐してきたのかを明らかにするためには、それらの方言が共有している改新（共有派生形質）を見出す必要がある。しかし、規則的な音韻変化など生起確率の高い改新は諸方言が分岐した後に並行的に起こりえる。そのため、分岐学では、並行的に起こりにくい、生起確率の低い改新に着目し、

それらを系統関係の根拠とする。2つの方言が生起確率の低い改新を共有している場合、その改新が同じ祖語から継承されたと考えなければ、両方言に分布することが説明できないからである。南琉球や宮古諸方言の系統関係については、これまで多くの先行研究が蓄積され、系統関係の根拠となる数多くの共有の改新が提案されてきた。本章では、論者の調査結果を含む八重山諸方言と宮古諸方言の大量の比較データを用いて、先行研究で提案されてきた共有の改新の妥当性を吟味し、新しい改新を提案している。その結果、先行研究で提案されてきた大きな系統群、すなわち「宮古語群」、多良間諸方言を除いた「共通宮古語群」と「伊良部・池間語群」は妥当であり、それらの語群を支持する根拠も多いことが確認できた。しかし、より細かい系統関係については、先行研究で提示されてきた改新の幾つかが根拠として適切でないことを論じた上で、これまで注目されてこなかった共有の改新を追加し、先行研究とは異なる系統関係を提案している。

第3章では、宮古祖語のアクセント体系の再建に向けた前段階として、宮古語の3つの方言（多良間仲筋、水納島、皆愛）を取り上げ、そのアクセント体系について論者の調査結果を報告し、分析を行っている。

第一に、3種類のアクセント型（a型、b型、c型）を区別する多良間仲筋方言の動詞と形容詞のアクセント体系を対象とし、活用形ごとの音調と韻律構造を明らかにしている。その結果、c型とされてきた動詞は活用形によりアクセント型の交替が認められるとしている。論者によると、多良間方言の非a型動詞について、c型の名詞に準じる活用形（否定形、接続系、理由形、2類動詞の連体形等）とb 型の名詞に準じる活用形（複合語語幹、過去形、未来形、1類動詞の連体形）を想定する必要がある。また、韻律語を形成しないとされてきた接辞の中に韻律語を形成する接辞があることも示し、その結果を元に韻律語の新しい定義を提案している。次に、多良間方言の形容詞については、3 種類のアクセント型（a型、b型、c型）が区別されることを明らかにした上で、叙述的用法に使われる「サアリ構文」が2つの韻律句（1つのアクセント型が実現する単位）を形成することを示している。なお、ここで、形容詞の「サアリ構文」の音調を正しく記述するためには、補助動詞と先行するさ副詞形とが融合する「融合形」と融合しない「非融合形」の区別を導入する必要があるとしている。最後に、動詞と形容詞の連体形と被修飾先の名詞の音調を詳細に調べ、連体節と被修飾名詞が構成する「連体構造体」において、被修飾名詞が含まれる韻律語の末尾拍に低核が付与されることを示している。これは、先行研究で提案された修飾要素と被修飾要素から構成される「メジャー句」という韻律範疇を支持する結果となった。

第二に、現地調査の結果を元に、多良間方言に系統的に近い水納島の名詞と形容詞のアクセント体系を対象とし、この方言のアクセント体系が多良間方言と非常に近いことを明らかにしている。すなわち、水納方言では多良間方言と同様に、3種類のアク

セント型（a型、b型、c型）が区別され、それぞれのアクセント型の実現を正しく記述するために多良間方言と同定義の「韻律語」を導入する必要があることを示している。のみならず、水納島のアクセント型の実現が多良間方言と同じ特徴を有しており、多良間方言のアクセント体系について提案されている「欠性的低音調」の分析が水納島方言にも適用できることを確認している。この結果は約250年前に話されていたと推定される多良間と水納の祖語において「欠性的低音調」のシステムがすでに確立していたことを強く示唆するものと論じている。

第三に、宮古島本島で話される下地皆愛方言の名詞アクセント体系について、初歩的な調査結果を報告している。この方言における単純名詞は2種類のアクセント型が区別されることを示した上で、それぞれのアクセント型の所属語彙を調べ、琉球祖語のA系列とB系列の語彙が同じアクセント型に属し、C系列の語彙とは区別される傾向があることを示している。これに対して、2つの単純名詞から構成された複合語の前部要素の位置にA系列やB系列の名詞が立つと、それぞれ異なる音調が観察されることを確認し、複合語の中にA系列対応型とB系列対応型の対立が保持されていることを示している。特に、3拍名詞を前部要素とする複合語は琉球祖語の系列に従って3種類の音調が実現する。そこで論者は、皆愛方言は複合語という環境では3型のアクセント体系を保持している可能性があると指摘している。

第4章では、歴史比較言語学の手法を用いて、宮古諸方言における動詞の共時的なバリエーションに着目し、宮古祖語における動詞形態論の再建と現在の方言にいたるまでの変遷のシナリオを提案している。特に、宮古諸方言の共時体系において想定される拡張語幹の歴史的な出自と、動詞に関わる接辞の由来と成立について考察を行っている。

第一に、現代の宮古諸方言の動詞形態論で想定される拡張語幹は主に宮古祖語の4つの形式、すなわち、「連用形」（過去接辞 *-tar- が付く形式）、「連体形」、「已然形」（理由接辞 *-ba が付く）と「未然形」（否定接辞 *-nu が付く形式）に由来することを想定した上で、1つの方言の共時体系において同じ拡張語幹として分析できる形式が、通時的に見て複数の形式に由来することを示している。のみならず、それぞれの方言で想定される拡張語幹の歴史的な出自が方言ごとに異なることも指摘している。なお、逆の現象、つまり、同一の形式に由来しながら、機能によって分岐した拡張語幹が存在することも示している。皆愛方言において「理由」と「確定条件」の機能に従って分岐した已然形はその例である。

第二に、動詞に関わる幾つかの接辞の由来やその歴史的な成立について考察を行っている。その中でまず、宮古諸方言に広く見られる意志形の接辞 -di を取り上げ、諸方言の詳細な比較を経て、宮古の多くの方言で否定接辞と同じ語幹に付く意志接辞-diは、本来未然形ではなく、勧誘形に付いていたことを示している。次に、意志否定形

に着目し、多良間方言の意志否定形を根拠に勧誘形が本来、m語尾を含んでいたことを示し、様々な方言に分布する反語形（-mma / -mba）が勧誘形の古い形、つまり、m語尾が付いた形式にさらに -ba が付いた形式に由来することを論じている。これらの結果を元に、宮古祖語におけるm語尾は2つの異なる語幹に付いていた可能性について述べている。

第5章では、本論文で明らかになった結果を要約し、残された研究課題について述べている。残された主要な研究課題として、主に形態的な形式に基づいて再建した宮古祖語の動詞体系と現代の方言における動詞の各形式のアクセントの整合性についての問題が挙げられる。多良間方言以外の方言（B系列対応型とC系列対応型の区別を保持している八重山の方言も含めて）についてその動詞のアクセント体系を明らかにすることが宮古祖語および先島祖語の動詞を再建する上では、最優先とするべき研究課題としている。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、沖縄県宮古諸島で話される日琉語族の言語である宮古語を対象として、論者自身の現地調査によって得られたデータに基づき、歴史比較言語学の方法を用いて、この言語の歴史を明らかにするものである。琉球諸語については近年新しい研究成果が相次いで発表されているが、論者は膨大な一次資料をもとに、これまでに提出された宮古語の言語史の修正を迫っている。新たな資料を提出しつつ共時的分析がなされており、確かな共時的分析を踏まえて通時態に取り組む展開には危な気がない。現在消滅の危機に瀕しており、話者数が非常に少ない宮古語の調査・研究は緊急度が高く、論者の提出した新たな資料は貴重である。

第1章では、研究の目的、方法およびデータについて述べている。宮古語は日琉語族の南琉球語派に属し、約40種類の方言からなっている。論者は現在話されている方言の記述データを元に、言語形式を比較することで、現在の方言に見られる諸形式が説明できる祖形と歴史過程を究明する方針を示す。

第2章では、南琉球および宮古語の系統関係を扱っている。系統関係を明らかにするということは、どの方言とどの方言が同じ祖語に遡るのか特定することであり、複数の方言が共通して経験した改新（共有派生形質）を見出す必要がある。南琉球や宮古諸方言の系統関係についても、これまでの先行研究で多くの共通の改新が特定されてきた。本章で論者は、八重山諸方言や宮古諸方言の大量の比較データを用いて、先行研究で特定された共通の改新の妥当性を検討している。そして、宮古語群を特徴づけると考えられてきた共有改新の一部は八重山諸方言にも存在することを指摘し、これらがむしろ南琉球語群を特徴づけるものであるという新しい解釈を提示した。また、南琉球および宮古語群の系統分類を明らかにするために、これまで注目されてこなかった数多くの共有改新の候補項目を追加している。

第3章では、宮古祖語のアクセント体系の再建に向けて、宮古語の3つの方言（多良間仲筋、水納島、皆愛）を取り上げ、そのアクセント体系について調査の結果を報告し、分析を行っている。第一に、多良間仲筋方言の動詞と形容詞のアクセント体系を扱って、活用形ごとの音調と韻律構造を論じている。動詞については、c型とされた動詞は活用形によって選択される異なるアクセント型の語幹を持っており、c型の名詞に準じる語幹とb型の名詞に準じる語幹が交替する。また、形態的に接辞でありながら、韻律語を形成する形態素があるとする。そこで論者は、韻律語の定義に含まれる「接辞が韻律語を形成しない」という指定を改訂する必要があると論じる。形容詞については、3種類のアクセント型（a型、b型、c型）が区別されていること、叙述的用法に使われる「サアリ」構文がアクセント的に2単位に分かれることを明らかにしている。さらに、動詞と形容詞の連体形と被修飾名詞の音調を調べ、連体節と被修飾名詞が構成する「連体構造体」において、被修飾名詞が含まれる韻律語の末尾拍に低核が付与されることを示している。第二に、多良間方言に系統的に近い水納島方言の名詞と形容詞のアクセント体系を扱い、この方言が多良間方言と同じアクセント体系を持つこ

とを示している。つまり、この方言の記述に当たって、多良間方言と同定義の「韻律語」という単位が必要であり、多良間方言のアクセント体系について提案される「低核」の分析が水納島方言にも適用できるとする。第三に、宮古島本島で話される下地皆愛方言の名詞アクセント体系について、初歩的な調査結果を報告している。まず、この方言における単純名詞は2種類のアクセント型が区別されることを示している。また、アクセント型の所属語彙を調べ、A系列とB系列の語彙が同じアクセント型に属し、C系列の語彙とは区別される傾向を示している。これに対して、2つの単純名詞から構成された複合語の第一要素の位置にA系列やB系列の名詞が立つと、それぞれ異なる音調が観察される傾向も確認している。特に、3拍名詞を第一要素とする複合語は琉球祖語の系列に従って3種類の音調が実現することを明らかにしており、この方言が複合語という環境で3型のアクセント体系を保持していると論じている。

第4章では、宮古諸方言における動詞の共時的なバリエーションに着目し、宮古祖語における動詞体系を再建し、現在の方言にいたる変遷を論じている。論者はまず、動詞の意志形、意志否定形、反語形の形式に着目し、琉球諸方言で対応が広くみられる宮古語のm語尾の考察を行い、その歴史的な関係を明らかにしている。その上で、現在終止形と同音の形式にしかつかないm語尾が、本来は別の語幹に付き、-baを伴うことができたことが示される。そして、共時体系において想定される「拡張語幹」が複数の歴史的な由来を持つことを主張している。

第5章では、本論文で明らかになった結果を要約し、残された研究課題について述べている。残された研究課題として、形態的な形式に基づいて再建した祖語の体系と動詞の各形式の変遷を動詞のアクセント情報と照らし合わせ、その妥当性を検討する必要性について触れている。

本論文に問題がないわけではない。第2章で宮古語のテーマから離れて八重山諸方言の話に移る展開は唐突であるし、込み入った移住の歴史についての情報がまとめて参照できるように構成されておらず、読者に親切な書き方になっているとはいえない。「宮古語史」と銘打つ論文でありながら（特に第3章で）共時的な分析が長く論じられることにも違和感が残る。しかし、諸方言それぞれの大規模な語彙調査、アクセント調査など、これまで遅れていた分野の調査・研究を自ら進め、本論文で初めて詳細に記述された事実に基づく共時的分析を行った上で、それを踏まえた通時的考察を行う本論文の研究成果は、それら構成上の短所を補って余りあるものである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０２０年６月２２日、調査委員４名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。